



Nagoya Philharmonic Orchestra

名古屋フィルハーモニー交響楽団 2020-21 SEASON

| 第73回市民会館名曲シリーズ

8月7日(金)

8
2020 August



プログラム Program

第73回市民会館名曲シリーズ“ボヘミアン・クラシックスIII”

The 73rd Famous Works Series “Bohemian Classics III”

2020年8月7日(金)18:45 日本特殊陶業市民会館 フォレストホール

6:45pm, Friday August 7, 2020 at NTK Hall Forest Hall

指揮:川瀬賢太郎〈名フィル正指揮者〉

Kentaro KAWASE, Resident Conductor

コンサートマスター:後藤龍伸〈名フィル コンサートマスター〉

Tatsunobu GOTO, Concertmaster

ドヴォルザーク:序曲『オセロ』作品93(B.170)

(約15分)

Antonín Dvořák (1841-1904): Othello Overture, Op.93(B.170)

スーク:組曲『おとぎ話』作品16

(約30分)

Josef Suk (1874-1935): Ein Märchen (Pohádka), Op.16

第1曲 ラドウースとマフレナの誠の愛と苦難

Liebe und Leid der Königskinder (O věrném milování Raduze a Mahuleny a jejich strastech)

第2曲 白鳥と孔雀の戯れ

Intermezzo - Volkstanz (Hra na labutě a pávý)

第3曲 葬送の音楽

Intermezzo - Trauermusik (Smuteční hudba)

第4曲 ルナ王妃の呪いと愛の勝利

Königin Runa's Fluch - Sieg der Liebe (Runy kletba, a jak byla láskou zrušena)

休憩 Intermission

(20分)

ドヴォルザーク:交響曲第9番ホ短調 作品95(B.178)『新世界より』

(約43分)

Antonín Dvořák: Symphony No.9 in E minor, Op.95(B.178) "From the New World"

第1楽章 アダージョーアレグロ・モルト

Adagio - Allegro molto

第2楽章 ラルゴ

Largo

第3楽章 スケルツオ:モルト・ヴィヴィアーチエ

Scherzo: Molto vivace

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ

Allegro con fuoco

主 催：公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団

後 援：愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・公益財団法人名古屋市文化振興事業団・

中日新聞社・CBCテレビ

助 成：  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

プロフィール Biography



Photo: Yoshinori Kurosawa

川瀬賢太郎 (名フィル正指揮者)

Kentaro KAWASE, Resident Conductor

1984年東京生まれ。私立八王子高等学校芸術コースを経て、2007年東京音楽大学音楽学部音楽学科作曲指揮専攻(指揮)を卒業。これまでに指揮を広上淳一、汐澤安彦、チョン・ミョンフンなどの各氏に師事。2006年10月に行われた東京国際音楽コンクール<指揮>において1位なしの2位(最高位)に入賞し、2007年3月には入賞者デビューコンサートで神奈川フィルハーモニー管弦楽団および大阪センチュリー交響楽団を指揮。

その後、東京交響楽団、読売日本交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団を始め、各地のオーケストラから次々に招きを受ける。2011年4月には名古屋フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任、意欲的な選曲と若さ溢れる指揮で聴衆を魅了。2014年4月より神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者に就任。卓越したプログラミングを躍動感あふれる演奏で聴衆に届けている。

海外においてもイル・ド・フランス国立オーケストラとの共演や、ユナイテッド・インストゥルメンツ・オヴ・ルシリンドと共演。

オペラにおいても、細川俊夫作曲「班女」、「リアの物語」、モーツアルト作曲「後宮からの逃走」、「フィガロの結婚」、「コジ・ファン・トウッテ」、「魔笛」、ヴェルディ作曲「アイーダ」など目覚ましい活躍を遂げている。

2007年～2009年パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)アシスタント・コンダクター。

現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団正指揮者、神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢常任客演指揮者、八王子ユースオーケストラ音楽監督、三重県いなべ市親善大使。2015年渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第64回神奈川文化賞未来賞、2016年第14回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第26回出光音楽賞、第65回横浜文化賞文化・芸術奨励賞を受賞。東京音楽大学作曲指揮専攻(指揮)特任講師。

ドヴォルザーク

序曲『オセロ』作品93(B.170)

オペラや劇の始まりを告げるのが本来の序曲だが、ロマン派の時代にはそれ自身で単独に演奏される演奏会用序曲が書かれるようになった。チェコを代表する作曲家ドヴォルザーク(1841～1904)も、熟練を増し社会的な名声を高めていた時期、1891年から1892年にかけて演奏会用序曲『自然と人生と愛』を作曲している。

第1作が『自然の中で』、第2作が『謝肉祭』、第3作が『オセロ』。この3作は『自然の中で』の冒頭のモティーフを共通の素材としながらもそれぞれ異なる性格を持ち、『オセロ』はシェイクスピアの戯曲による標題音楽風のドラマティックな序曲。曲はゆるやかなテンポの静謐な序奏で始まり、オセロの嫉妬を現わす激烈な主題、妻デズデモーナの優美さを思わせる柔軟な主題、3部作に共通する3度の下行を特徴とする主題を中心に緊張感のある音楽が織りなされていく。華やかな『謝肉祭』に比べると演奏される機会は少ないが、ドヴォルザークのすぐれた表現力が發揮された傑作である。

3部作の初演は1892年4月にプラハで行われ、それからまもなく彼は渡米。帰国してからは標題音楽に意欲を注ぎ、交響詩5曲を立て続けに創作している。

作曲=1891-92年

初演=1892年4月28日 プラハ、国民劇場(作曲者自身の指揮／プラハ国民劇場管弦楽団)

楽器編成=フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、バス・ドラム、ハープ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

スーク

組曲『おとぎ話』作品16

ドヴォルザークの娘婿であるヨゼフ・スーク(1874～1935)は19世紀末から20世紀初頭のチェコ音楽を担った作曲家、ヴァイオリニスト。20世紀の著名なヴァイオリニスト、ヨゼフ・スークの祖父である。

彼はプラハ音楽院で学び、卒業後も室内楽をヴィハンに、作曲をドヴォルザークに師事している。1892年、18歳の時からチェコ弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者として活躍し、また、1892年に書いた『弦楽セレナーデ』がブラームスの推薦でジムロックから出版されるなど作曲家としても順調な道を歩み、やがて同じプラハ音楽院の出身であるノヴァークとともにチェコ音楽を推進する作曲家として見なされるようになった。

民俗音楽や文学作品からあまり影響を受けていないスクだが、まだ20代後半の若い頃、1897年から1898年にかけてチェコの詩人ユリウス・ゼイエル(1841～1901)の劇「ラドゥースとマフレナ」のための付随音楽を作曲している。4曲から成る組曲『おとぎ話』はこの付随音楽を基に編まれたもので、ドヴォルザークの愛娘オティリエとの結婚から2年後の1900年に完成。呪いをかけられたラドゥース王子とマフレナ姫の愛の物語が、スクの初期のオーケストラ書法によって叙情的、詩的に描かれている。

第1曲 ラドゥースとマフレナの誠の愛と苦難

3つの部分から。独奏ヴァイオリンが奏でるマフレナの主題がこの上なく美しい。

第2曲 白鳥と孔雀の戯れ

陽気なポルカ。中間部では素朴な旋律が歌われる。

第3曲 葬送の音樂

ラドゥース王子の父王の死を悼む音楽が重苦しく流れる。

第4曲 ルナ王妃の呪いと愛の勝利

ラドゥース王子に呪いをかけたルナ王妃。激しく荒々しい主題と、静かで穏やかな主題が現れるが、最後はマフレナの主題が高らかに、そして清らかに繰り返され、呪いが解けて愛が成就したことが示される。

作曲=1899-1900年

初演=1901年2月7日 プラハ、ルドルフィヌム(オスカル・ネドバルの指揮／チェコ・フィルハーモニー管弦楽団)

楽器編成=ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、タム・タム、バス・ドラム、トライアングル、ハープ、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

ドヴォルザーク

交響曲第9番ホ短調 作品95(B.178)『新世界より』

ドヴォルザークの創作活動の中で大きな意義を持つのがアメリカ時代である。

演奏会用序曲『自然と人生と愛』の初演から5ヶ月後の1892年9月、ドヴォルザークはニューヨークのナショナル音楽院を運営するジャネット・サーバーの招きに応じ、アメリカへと赴いた。10月にはカーネギー・ホールの演奏会で指揮者としてアメリカの聴衆の前に登場し、コロンブスのアメリカ大陸発見400年記念を祝うためにサーバーから委嘱された『テ・デウム』を初演している。友人に宛てた手紙で彼自身が書いているように、アメリカの人々が彼に寄せる期待は大きかった。その思いに応えるように創作の筆は進み、交響曲第9番『新世界より』、弦楽四重奏曲

第12番『アメリカ』、チェロ協奏曲口短調などの名作が次々と生みだされていった。

交響曲第9番『新世界より』は渡米の翌年、1893年1月から5月にかけて作曲。12月16日にカーネギー・ホールでハンガリー生まれのアントン・ザイデルが指揮するニューヨーク・フィルハーモニックによって初演され、大成功をおさめている。

アメリカ先住民の音楽や黒人靈歌からインスピレーションを受けている旋律やリズムが故郷ボヘミアへの郷愁と融合し、独特な味わいを醸し出しているこの第9番。1865年の第1番『ズロニツェの鐘』に始まる彼の交響曲創作は、1885年の第7番で転機を迎えて書法、表現とも深まりを見せているが、ボヘミアの民族的な情趣を強く打ち出した1889年の第8番を経て、第9番『新世界より』は円熟の極みへと至り、聴く人の心をつかむ無比の傑作として今日まで高い人気を誇っている。

楽章は次の4つ。伝統に従った古典的な造りではあるが、豊かな楽想はドヴォルザークならではのもの。また、モティーフの回想によってそれぞれの楽章は結び付けられ、全体は強い統一感でまとめ上げられている。

第1楽章 アダージョ・アレグロ・モルト

ホ短調。ソナタ形式。短いが劇的な序奏は第1主題のモティーフを含み、主部と密接に結び付いている。多様な旋律素材と調の変化を伴いながら、提示部、展開部、再現部が豊かな表情で進められていく。

第2楽章 ラルゴ

変ニ長調。イングリッシュ・ホルンが奏でるしみじみとした調べで知られる緩徐楽章。3つの部分から成り、嬰ト短調の中間部の終わりでは第1楽章のモティーフが姿を見せる。

第3楽章 スケルツオ:モルト・ヴィヴァーチェ

ホ短調。エネルギーに満ちたスケルツオ主題に対して、2つのトリオはなめらかで穏やか。コーダでは第1楽章のモティーフが再び現れる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ

ホ短調。情熱をたたえた力強いフィナーレ。ソナタ形式だが、第1楽章、第2楽章、第3楽章の主要な主題が巧みに用いられている。

作曲=1893年

初演=1893年12月16日 ニューヨーク、カーネギー・ホール(アントン・ザイデルの指揮／ニューヨーク・フィルハーモニック)
楽器編成=フルート2(ピッコロ持替1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット2、ファゴット2、
ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部(第1ヴァイオリン、
第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)